



「カタリバ」は17年前、大学生だったころ、もう1人の仲間と2人でつくった団体です。先行き不透明な社会を生きる中高生たちに、キャリア教育の機会として、少し年上となる大学生などと対話するワークショップ「カタリ場」を提供しています。

今村 久美 認定特定非営利活動法人カタリバ代表理事

生き抜く力、鍵は学外との協働



キャリア教育は進路選択を考える教育と捉えられがちですが、私は今の日常の意味付けを変え、ポジティブな行動の積み重ねを促すことだと考えています。「私の夢は何?」と頭の中で「北極星」を探すよりも、まずは小さな行動を起こすことによって進み方を知る

いまむら・くみ 慶應大卒。在学中に「カタリバ」を発足させ後に認定特定非営利活動法人となる。中央教育審議会の教育課程企画特別部会委員などを歴任。38歳。

「羅針盤」を体得していくことが、キャリア教育のスタートだと信じてきました。また、思春期の中高生に内省を促すには、親や先生などの「タテの関係」や、友達など「ヨコの関係」だけでなく、「ナナメの関係」にある少し年上の存在が必ず必要だと感じました。

このようなキャリア教育への考え方とナナメの関係は、カタリ場はもちろんのこと、東日本大震災後に始めた被災地の子どもたちの放課後の居場所提供などでも、一貫して大切にしていることです。近年は、高校生が主体的にプロジェクトを実行する学び「マイプロジェクト」の推進に力を入れています。元はといえば、自分自身の経験、戸惑いが活動の原点にあります。高校時代まで岐阜県高山市で育った私にとって、関東での学生生活は文化が全く異なる海外に留学したような思いを抱くこととなりました。今では、その土地ならではの強みがあることも分かりますが、あのころは、生活環境によってこれほど見えていた未来が違ってくるという現実に愕然としました。日本の学校教育は、先生の方で全国どこでも同水準の教育を受けることが可能ですが、学校外教育は各家庭の事情により差が出やすいものです。さらに現代の子どもたちはスマートフォンで、大人の目が届かない所で他者とのつながるようになりました。学校の校門を出てからの時間をどう充実させ、安全に支え導くかという課題が生まれています。次期学習指導要領が掲げている「社会に開かれた教育課程」の動向にも注目しています。実現には、まだまだたくさん壁がありますが、不確実な社会を生き抜く力を子どもたちが身に付けるために、学校の外の人たちとの協働は鍵になってくるのではないのでしょうか。私たちにできることは、非営利活動法人として実績を積み、信頼性を高めていくことだと思っています。

次回は野澤朗・新潟県上越市教委教育長